

第1章 寒風の日比谷公園

1

その日の日比谷公園は寒々としていた。

日本初の洋式庭園として明治三六年（一九〇三年）に開園した日比谷公園は一六ヘクタール以上ある園内に四季折々の花が咲き、霞が関や日比谷周辺に勤務するサラリーマンの憩いの場である。しかし、冬はちょっと趣が違う。昼休みならともかく、夕闇が迫る頃ともなれば、園内を歩く人もまばらになる。昭和六〇年（一九八五年）一月三一日、木曜日、その日は典型的な冬の気圧配置で、雲ひとつない晴天だったが、木枯らしが吹き荒れ、ときおりビューと吹き抜ける風が肌を刺した。

そんな日比谷公園の中をコートも着ずに歩き回っている初老の男がいた。午後四時過ぎのことである。男は、身長一六五センチくらいの小柄だが、見るからに高価そうなスリーピースに身を包み、白髪混じりの髪をオールバックに固め、身嗜みは決まっていた。その風体は大企業の重役そのもので、鋭い眼つきは自信に満ち溢れ、これまで蹉跌など経験したことのないことをうかがわせた。日の暮れ始めた

公園のなかを口をへの字に結び、眉間にしわを寄せ、遠くを見つめるような眼差しで歩き回る姿はどこか違和感があった。

しばらく歩き回って、男は噴水のある広場のベンチに腰を下ろした。背広の内ポケットからダンヒルと銀製のライターを取り出し、手をかざした。見上げるように眼をつむり、煙を吐き出した。そして、左手のロレックスの腕時計を見た。午後四時半を少し過ぎたところだった。

「先生、お寒いなかお待たせしました。申し訳ありません」

小走りに駆け寄ってきた黒縁メガネを掛けた男が息を弾ませて声を掛けた。東都相互銀行取締役の龜山卓彦である。

東都相銀は資金量一兆二〇〇億円で、業界五位の大手相銀である。店舗は都内中心にちようど一〇〇か店、そのほとんどが駅前にあった。午後三時で店を閉める銀行業界にあって、「午後八時まで営業する」というユニークな経営で知られていた。本店は日比谷通りを田村町（西新橋）の交差点から浜松町のほうに向かって三〇メートルほど行ったところにあった。日比谷通りに面した一〇階建てのビルである。

五階にある融資部の一角に二〇畳ほどの広さの融資担当役員室があり、そこが龜山の執務室だった。午後四時一〇分ほど前、その部屋の電話が鳴った。受話器を取ると、顧問弁護士で常勤監査役の井浦重男からだった。

「龜山君、悪いが四時半に日比谷公園の噴水のところに来てくれないか」

「今日は寒いですよ。いいんですか。先生の事務所でもいいじゃないですか」

龜山は井浦が何か本当に重要な案件で自分を呼び出すときは、いつも日比谷公園なので、深刻な話だと想像はできた。

「いや、まずいな。少々寒いが外がいい。あまり寒きや、俺の店 に行こう」

井浦の事務所は日比谷公園の霞が関寄りにある飯田ヒルの三〇階にあった。三〇階は個人事務所ばかりが入居していて、あまり目立たない場所だった。日比谷公園を見下ろす眺めのいい部屋で、亀山は「密談にはいい場所だ」と思っていた。しかし、猜疑心の強い井浦は、本当に大事な話は絶対に事務所ではしなかった。

「わかりました。四時半にまいります」

亀山は受話器を置くと、考えた。

井浦さんとは昭和三〇年代からの付き合いだが、重要な案件は日比谷公園を歩き回って考える癖がある。きつと、今日ももう日比谷公園に向かっているだろう。でも、いったいなにことだろう。

いろいろ思いをめぐらせたが、ここ一、二年は東都相銀に大きなトラブルもなく、井浦が何を相談したいのかわからなかった。デスクで考え込んでいるうちに時間が経ってしまい、日比谷公園の噴水に到着するのが約束の四時半を少し回ってしまったのだ。

「いいさ、気にするな。こちらこそ寒いのにこんなところに呼び出してすまなかった。俺は趣味みたいなものだからな。え、歩くのがな」

息を弾ませている亀山を前に、井浦はそう言って立ち上がった。半分ほど吸ったダンヒルを足元に捨て、歩き出した。井浦よりかなり上背のある亀山があとについた。おしゃれな井浦とは対照的に亀山は身嗜みにはまったく頓着しない性格で、くたびれた濃紺の背広を着ていた。それが傍目にはなんともアソビバランスだった。

「実は、最後の戦いを始めようと思う。もう動かないと、うちの銀行はもたない。君はどう思う？」
木枯らしが吹き抜け、二人の髪を揺らした。亀山は首をすくめ、井浦に並んだ。

「ちよつと待つてください。今、コートを着ますから。先生は寒くないんですか。すみません。よく聞き取れなかったので、もう一度お願いします」

二人は立ち止まった。亀山が右腕に抱えていたよれよれのグレーのコートを着た。

「俺は寒いのは慣れている。うん、それでな、最後の戦いを始めようかね。どう思う？」

井浦は前をじつと見据えたまま、言った。

「どういうことです。最後の戦いつて？」

亀山は黒縁のメガネ越しに井浦の顔を覗き込むようにして聞いた。

「もう動かないと、うちの銀行はもたない。どうだ？」

「日銀検査のことですか」

日銀検査は、日本銀行が取引する金融機関の資産内容などをチェックするために二年か三年に一回、実施している検査のことだ。大蔵省も監督当局としてやはり二年か三年に一回、銀行検査を実施している。相互銀行に対しては両方とも二年に一回実施するのが慣例で、相銀は毎年、日銀検査が大蔵検査を受ける仕組みになっている。

東都相銀は、その日銀検査を昨年一〇月から一か月間受けた。その結果が出たのは一二月中旬で、担当した検査役から経営陣は経営内容の改善を強く求められたのである。

「そう、日銀検査が大きい」

「たしかに厳しいものでした。貸出金九〇〇〇億円のうち、二〇〇〇億円を不良債権と認定したんですから。うちの年間の経常利益は約五〇億円です。不良債権の半分を引き当てるで一〇〇〇億円ですが、埋めるのに二〇年かかります。そんなことをすればうちの銀行は潰れてしまうでしょう。ここ一、二年で急増したわけでもないし、日銀だって本気じゃないでしょう。心配はないような気がします……」

「預金者保護は錦の御旗だ。うちが潰れば、金融恐慌の引き金になる可能性だってある。日銀にしたらって、大蔵省にしたって、そんな危ない橋を渡れないのはわかってる。だがな、不良債権をこれ以上増やすわけにはいかないし、できれば減らさなきゃならん。君たちは他人事のように思っているかもしれないが、去年五月に発表になった日米金融障壁委員会の報告っていうのがあるだろう。これは大きい。今までと同じというわけにはいかなくなる」

「日米金融障壁委員会の報告って、例の金融自由化のやつですか。あれは大手銀行の問題でしょ。うちみたいな相銀業界はあまり関係ないです」

日米金融障壁委員会は、二年前の昭和五八年一月にポーンデン大統領が訪日した際、曽根崎康史首相との日米首脳会談で設置することが決まったもので、大蔵省と米財務省が協議する場である。テーマは日本の金融資本市場の開放と金融自由化の進め方だった。三回の協議を経て昨年五月末に報告書がまとまった。日本の預金金利自由化のスケジュールが示されたほか、米銀などの外国銀行が日本市場で信託業務を営むことが認められることになった。

戦後の護送船団行政のもとで安穩としていた日本の金融界にとって、まさに黒船来襲であった。しかし、危機感を抱いたのは都市銀行や長期信用銀行、信託銀行の大手銀行だけで、東都相銀のような相銀業界にとつて、その危機感は他人事で、実感としては湧いてきていなかった。特に、東都相銀のようにいくつもトラブルを抱えている相銀は自分の頭の上の蠅を追い払うのに汲々としており、「そんな先のことを」というのが現実だった。「関係ない」という亀山の反応はもっともであった。

「君、それは違うぞ。金利の自由化はな、大手じゃなく、相銀以下の中小金融機関が最も影響を受けるんだ。外銀は今のところ信託業務に参入したいと言っているだけだが、いずれ日本の銀行を買収したいと言ってくるに違いない。そうなれば、うちみたいな内容の悪いところが標的になるぞ。それを避け

るには少しでも内容をよくする以外ないだろう。従業員三〇〇〇人の生活がかかっている」

ずっと前を見据えて話していた井浦が立ち止まり、左脇をかがむようにして歩いていた亀山を鋭い眼で見上げた。

「では、どうするのでしょうか」

二人は日比谷公園の有楽門まで来ていた。西の空が茜色に染まり、寒さが一段と身に染みだ。井浦がダンヒルを取り出し、苦笑しながら火をつけた。

「今日は冷えるな。どこかでお茶でも飲むか。さすがの俺もコートなしじゃ寒くてかなわん」

「そうですね。どこに行きましょつか」

「俺の店、でもいいが、まだ五時だ。その辺の喫茶店にしようや」

二人は、日比谷通りを渡って銀座方面に向かった。そして、三新ビルの地下一階の喫茶店に入り、一番奥の席についた。

井浦はまばらな席を見回し、うなずいた。

「こういう店がいいんだ。一回も入ったことがなけりや、我々を知った人間はまずいまいと考えているからな」

「そうですね。ここならじっくり話せます。でも、先生には場違いな気もしますけどね」

「それがいいんだ」

ウエイトレスがホットコーヒーを運んできた。

井浦がコーヒーをすすりながら切り出した。

「俺も、親父に請われて監査役になって八年が経つ。昭和五二年だからな。その前の顧問時代も含めれば一〇年。親父が死んで、六年だ。その間、まあいろいろあった。去年の秋には義治さんも亡くなっ

た。もう、銀行にはファミリアもジュニアしか残っていない」

井浦が「親父」と呼んだのは、東都相互銀行の創業者、東条義介のことだ。

義介は明治天皇が崩御した大正元年（一九一二年）一月一日に山梨県韮崎市近郊の貧農に生まれ、小学校を卒業したのち、父の幸助とともに上京し、東京市役所の給仕のかたわら夜学に通い、日本大学専門部建築科を卒業した。その後、幸助とともに屑鉄業を始め、財を成した。戦後の復興期にミシンの月賦販売をしていた義介は、各地に零細金融の無尽が乱立するのを見て、自分も無尽を作って儲けようと考えた。そうして誕生したのが東都貯蓄殖産無尽である。昭和二十四年（一九四九年）のことだ。昭和二六年の相互銀行法の施行を受けて、「東都相互銀行」に社名を変更、以来、義介はワンマンオーナーとして君臨し続けた。

もともと、義介は銀行家というより事業家だった。銀行経営者になったのも銀行を自分の事業拡大の武器として利用するためと言ってもよかった。不動産、レジャー開発などを手掛け、大物実業家に野心を燃やす義介にとって、銀行は実に便利な武器だった。そして、事業を担う東条ファミリア企業に多額の情実融資を重ねていった。

東都相銀はこうした情実融資に加え、大掛かりな仕手株投資への資金提供、大物政治家との癒着など、数多くの問題点が指摘されていた。支店出店の際、店舗予定地を腹心に事前に買収させ、あとで銀行がこの土地を高値で買い込むなど、土地ころがして私腹を肥やすようなことも平気でやった。東都相銀は、大蔵省、日本銀行の金融監督当局にとって常に問題銀行だった。だが、義介の手口が巧妙だったうえ、政界との深いつながりが壁となつてなかなか手が出せず、その経営健全化は長年懸案のままだった。

その義介が昭和五四年（一九七九年）六月に急逝すると、実弟の義治社長、義介の長女・君子の夫（女婿）の島田昌夫副社長が経営の舵取りをするようになった。しかし、その後の相次ぐトラブルの責

任を取るかたちで義治社長は代表権のない会長に退き、昨春秋に亡くなった。島田副社長も義治社長と同時に引責辞任し、東都相銀を去った。ファミリーで銀行に残っているのは、義介の長男、秀一常務だけだった。その秀一が井浦の言つ、「ジュニア」だった。

「先生、秀一常務をどうかしようというんですか？」

「ふむ」

井浦はコーヒークップを口に運び、にやりと笑った。そして、カップをテーブルに置くと、ダンヒルに火をつけ、紫煙を天井に向かってくゆらせた。

「亀山君、いいか。日銀が認定した不良債権二〇〇〇億円はどこ向けの貸し出した。考えてみる」

「まあ、全部、ファミリー企業向けですね。一〇〇〇億円が東都海洋クラブ。七〇〇億円は墨田産業、東都都市開発、東都物産の三社。残りの三〇〇億円はファミリーではないにせよ、親父の側近の鶴丸洋右がやっている洋誠総業向けとかですね」

「じゃあ、これを回収できると思うかい。できるとすればどうすればいい？」

身を乗り出した井浦の質問に、亀山はのけぞるように眼をそらし、考え込んだ。しばらくして天井を見上げていた眼を井浦に戻した。

「先生、東都海洋クラブは無理ですね。東都物産、洋誠総業も駄目でしょう。まあ回収できそうなのは墨田産業、東都都市開発の二社だけです」

「亀山君、いいか。東都相銀は集めたカネを東条ファミリーに流し込む仕組みになっている。流し込んだカネで消えてなくなった分もあるが、ファミリー企業などに優良資産として残っている分もある。その優良資産を銀行に取り戻す。それをやらなきゃいけないんだ。わかるだろう。そのためにはどうすればいいか」

「先生、おっしゃりたいことはわかります。でも、どうするんですか」

「君も、もとは検察事務官だった。攻め手はあるよ。法律面からも考えてみるよ」

井浦は昭和元年（一九二六年）の大晦日生まれ、昭和二三年東京大学法学部在学中に司法試験に合格、昭和二五年検事になった。前橋地検で三年経験を積んだあと、昭和二八年から東京地検特捜部の検事となり、海運疑獄などの捜査で活躍、カミノリ井浦と異名を取った。昭和四年（一九二九年）九月七日生まれの亀山は、井浦より三歳年下だったが、昭和二七年に明治大学法学部を卒業、検察事務官となった。井浦が東京地検特捜部に赴任してきたとき、亀山は特捜部に在籍、一緒に仕事をした仲だった。

亀山は検察事務官を一〇年務めて、昭和三七年、東都相銀に入行した。当時の相銀業界はどこも人材不足で、事務処理能力に長けた亀山はすぐに頭角を現し、とんとん拍子で出世した。一方の井浦は、将来の検事総長候補とも言われる逸材だったが、昭和四二年、突然、検事を辞め、弁護士事務所を開業した。そして、東京地検特捜部長OBで、特捜の猛虎と恐れられた河本栄次郎弁護士（元名古屋高検長）から東条義介を紹介され、昭和五〇年に東都相銀顧問になった。そうして再び、井浦と亀山のコンビで仕事をすることになったのである。

考え込んでいた亀山がメガネに手を掛け、「えー」という顔つきをした。

「ジュニアを解任でもするんですか。ですが、うちの銀行の株の過半数は東条ファミリーが持っているんですよ。簡単じゃありませんよ」

「過半数じゃなくせばいいだろう。来週までに君がそのための叩き台を考えてくれ。検討項目をメモにしてな。それをもとに考えよう。事は急を要する。今日は木曜日だが来週の水曜日は何日だ？」

「二月六日です」

「よし、六日に検討しよう。稲村社長、滝尾常務の二人も入れて四人で検討する。二人に日時だけ耳

打ちしておいてくれ。当日、君が検討資料を作つて持つてこい。時間は夜がいい。午後七時頃からにするか。場所は俺がセツトする。まああとで連絡するさ」

「わかりました」

亀山は井浦の自信に圧倒された。本当に解任などできるのだろうか。と半信半疑だったが、これまで井浦の言い出したことに間違いはなく、失敗もなかった。「わかりました」と、自然に口が動いた。

二人は喫茶店を出ると、日比谷通りに出た。井浦が日比谷公園のほうをじつと見つめながら、言った。「人間、最後は原点に戻るんだよ。俺ももつ六〇だ。親父の裏方仕事を任せられ、法律違反スレスレのことやつてきた。それもこれも東都相銀のためさ。だが、もつそんなことは続けられない。行員三〇〇〇人のために立ち上がる時がきたんだよ。じゃ、頼んだぞ」

うつむきながら聞いていた亀山を残し、井浦は日比谷通りを渡つた。亀山はしばらく井浦の後姿を見送つた。それから、日比谷通りを新橋方面に向かつて歩き出し、東都相銀本店に帰つた。

井浦は、また日比谷公園に入り、中を突き抜けて霞が関方面に向かつた。

「井浦さん、井浦さんじゃないですか」

日比谷図書館の脇を通つて西幸門に出たときだった。突然、すれ違つた男から声を掛けられた。

井浦が振り向くと、四〇歳くらいの男が笑顔で近寄つてきた。あたりは夜の帳とほりが下りていて、咄嗟ちつきには誰かわからなかつた。

「井浦さん、私ですよ。ほら、例の買い占め事件のときにお世話になつた田所ですよ」

それでも井浦は思ひ出せず、眼を凝らすように男を見つめた。ベージュのジャンパーを着た小太りの男だった。井浦より少し上背があり、身長は一七〇センチくらい、ネクタイはしていなかった。

「いやだな。もつお忘れですか。義介さんが手掛けた例の日本チーセル部品株の買い占め問題のとき、